

平成17年度教員個人評価報告書

佐賀大学農学部

1. 個人評価の実施状況

(1) 対象教員数, 個人評価実施者数, 実施率など。

対象教員数	個人評価実施者数	実施率
57人	57人	100%

<注>

平成17年度個人評価は, 平成17年度の在職者(年度中途からの採用者等を含む。)57人全員について行った。

(2) 教員個人評価の実施概要

1) 評価組織(農学部評価委員会)の構成

学部長	田代洋丞	
副学部長	野瀬昭博	
〃	藤田修二	
大学評価委員	半田駿	
〃	加藤富民雄	
応用生物科学科長	和田康彦	
生物環境科学科長	甲本達也	
生命機能科学科長	柳田晃良	
附属資源循環フィールド科学教育 研究センター長	尾野喜孝	
事務長	志波政孝	

2) 実施内容, 方法

佐賀大学農学部における教員の個人評価に関する実施基準及び農学部教員個人評価実施要項に基づき, 平成17年度の活動実績(著書, 論文等の発表実績については, 過去3年間)について, 4領域(教育, 研究, 国際交流・社会貢献, 組織運営)の個人評価を行った。また, 4領域の重み付けについては, 教員の職種, 職務の特殊性の状況に応じ配慮した。「農学部教員個人評価実施要項」参照

<個人評価の経緯等>

①学部長が, 対象教員に対し, 個人評価関係書類を配布し, 平成18年7月14日(金)までに, 学科長又はフィールドセンター長に提出するよう依頼した。(平成18年6月19日)

一部の教員から関係書類が期限内に提出されなかったため, 7月18日に再度提出を依頼した結果, 全員が提出した。

②提出された関係書類(別紙様式1~3)について, 各教員の活動実績を熟知した, 学科長, フィールドセンター長が中心となって, 審査を開始した。(平成18年7月)

③上記審査に併行して学部評価委員会を開催(7月31日, 8月21日)し, 問題点等を検討した。

○対象教員57人全員の個人評価を行った結果, 各教員による自己点検・評価の結果は, 一部を除いて, 概ね妥当と判断した。

④学部長から、対象教員に対し、個人評価結果を通知した。その際、評価結果に対して不服がある場合は、1週間以内に不服申立書（様式任意）を学部長まで提出するよう付記した。（平成18年8月31日）

⑤不服申立書を提出した教員はいなかった。

〔添付資料〕

①佐賀大学農学部における教員の個人評価に関する実施基準

②農学部教員個人評価実施要項

③農学部個人評価基準

④平成18年度個人目標申告書（別紙様式1）

⑤平成18年度個人目標申告書（別紙様式1の記入例）

⑥平成17年度活動実績報告書（別紙様式2）

⑦平成17年度自己点検・評価書及び評価結果（別紙様式3、4）

⑧農学部個人評価基準に基づく自己評価結果（別紙様式3の別表）

⑨個人評価結果の書き方について

2. 評価領域別の集計・分析と自己点検評価

(1) 教育の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析

<授業担当>

担当科目数	教員数		
	全学教育	専門	大学院
2以下	36	3	14
3~5	1	8	33
6~9		40	2
10以上		5	

①全学教育科目は65%の教員が担当している。助手と新任者は授業担当から除かれており、隔年担当の科目があることから昨年より開講数が減少している。

②専門科目は一部の助手を除いて全ての教員が担当しており、約80%の教員が6~10科目を担当している。

③大学院科目は86%の教員が担当しており、70%以上が3科目以上を受け持っている。助手を除くとほぼ全員が担当している。

<学生指導>

指導学生数	教員数		
	学部	修士	博士
2以下	7	26	22
3~5	33	16	6
6~9	13	4	1

④指導学生数では、学部生3~5人、修士学生2人以内、博士学生2人以内が多数となっている。全体として前年より指導する学生数が増加している。

<教育改善等>

教育改善内容	教員数

シラバスの改善	13
授業の工夫	52
TAの活用	23

⑤教育改善では、ほぼ全ての教員が授業にそれぞれ工夫を凝らしており、TAの活用も40%以上である。昨年に比べ教育改善に積極的に取り組んでいることが数字で現れている。

<FD活動>

教育研修・教育活動の内容	教員数
FD, 研修等参加	15

⑥顕著なFD活動は、教員の約26%にとどまっている。

<学生の生活指導等>

学生の生活指導等の内容	教員数
オフィスアワー	31
サークル顧問	6

⑦学生の生活指導面では、オフィスアワーを活用した教員が54%を超えて、昨年より10%増加した。

2) 教育の領域における教員の活動評価集計と分析

重みは、88%の教員が0.3又は0.4でその評価はすべて3以上であった。達成率70%以上の教員が90%であった。

したがって、農学部の教員は、教育に重点をおき、その達成率も高いことが推察される。

3) 教育の領域における自己点検評価

ほとんどの農学部教員が本領域に高い重み付けを行ったのは、教育先導大学である佐賀大学の教員として当然(正常)であり、それなりに評価できる。また、講義担当および学生指導については、全教員の活動状況が非常に良く、前年度より向上しており、評価できる。一方、FD等については、農学部教員がさらに一丸となって取り組む必要がある。

(2) 研究の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析(数値は教員数を示す。)

<著書及び論文発表>

冊数又は編数	著書	総論文	和文	内査読あり	英文	内査読あり	その他
1~5	14	30	27	19	28	23	18
6~10	1	15	3		8	5	1
11~15		4			4	1	1
16~20		1			1		
21~25		2			1		
内学生と共著 の件数							
1~5	3	22	20	8	23	13	3
6~10		7	1		2	1	
11~15		4			3	1	
16~20		1			1		

④過去3年間で52人の教員が論文を1本以上を、22人の教員が6本以上を書いている。(3人は記載なし)

②英語論文は42人で、29人が査読ありの雑誌等に投稿している。

③34人が学生・院生との共著論文をだしている。

<学会発表>

学会発表件数	国内	外国
1～5	40	14
6～9	5	
10以上	3	

④48人が学会発表をおこなっている。

<科研費申請>

科研費申請件数	教員数
1～2	38
3～5	5

⑤科研費申請人数は43人である。

<外部資金導入>

外部資金の導入件数	教員数
1～2	24
3～5	8
6～9	2
10以上	1

⑥外部資金の獲得者数は35であり、10件以上獲得した教員もある。

2) 研究の領域における教員の活動評価集計と分析

重みの平均値は0.35で、最低は0.1、最高は0.8である。評価の平均点は3.58である。達成率は平均74.7%であった。論文数等の高い業績内容を考慮すると、教員は研究には自ら高いハードルを設定していることがわかる。

3) 研究の領域における自己点検評価

ほとんどの農学部教員が本領域に高い重み付けを行ったのは、研究意欲の高さを示すものであり、高い研究活動実績とともに高く評価できる。なお、教員自身の自己評価と達成率がやや低いのは、教員の研究意欲に比して研究環境が十分ではないことに原因があると考えられる。今後、教員が研究に専念できる時間の確保、研究施設の整備等が必要である。

(3) 国際・社会貢献の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析。(数値は教員数を示す。)

<国際交流>

件数	実績数	留学生数	共同研究者	講演会
1	16	21	3	10
2	8	8	0	4
3	4	2	1	2
4	1		1	0
5	0		0	1

6以上	4		2	0
-----	---	--	---	---

① 国際交流の実績では、教員の約 60%が何らかの交流をおこなっている。また、半数の教員が留学生を引き受け指導している。

② 全ての項目について前年度を上回った件数となっている。

<社会貢献>

件数	学会役員	審議委員	非常勤講師	地域貢献
1	10	7	7	20
2	8	5	3	14
3	8	3	2	2
4	4	2	0	1
5	1	4	1	0
6以上	1	2		1

③社会貢献面では、半数以上の教員が学・協会の役員を引き受けており、地方公共団体の審議委員にも半数近くが就任している。

④非常勤講師を引き受けている教員は 23%であるが、5 箇所も引き受けている教員がいる。

⑤地域貢献として、多くの講演会や集会に参加した教員は 66%以上である。

2) 国際・社会貢献の領域における教員の活動評価集計と分析

この領域に対する重みは、93%の教員が 0.1 と 0.2 で、評価も 1 から 5 とばらつきがあり、達成率も同様であった。したがって、この領域における農学部教員の活動は、個人差が大きいと考えられる。この領域における活動は前年実績を上回っており、教員の意識の向上が示唆される。

3) 国際・社会貢献の領域における自己点検評価

農学部の半数以上の教員が高度な国際・社会貢献を行っており、農学部全体の実績は高く評価できる。なお、この領域における農学部教員の活動には、大きな個人差が見られるが、その原因として、農学部教員の年齢構成、専門領域の多様性等が考えられるので、個人差そのものに問題はないであろう。むしろ、教員の多様な能力が有効に活かされる領域として重要視し、さらに貢献度を高めて行く必要があると考えられる。

(4) 組織運営の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析。

<組織運営の活動実績>

参加委員会数	教員数
1	5
2	5
3	9
4	10
5	8
6以上	12

①なんらかの委員をしている教員は 49 人であり、その多くが複数の委員会に参加している。一人あたりの委員数は 16 年度より増加している。

<学内行事への参加実績>

参加行事数	教員数
1	20
2	10
3	3
4	1
5	
6以上	4

②38人の教員が学内行事等に参加している。主なものは、ジョイントセミナー、オープンキャンパスである。

2) 組織運営の領域における教員の活動評価集計と分析

重みの平均値は0.17で、最低は0{助手}、最高は0.5である。評価の平均点は3.79で、達成率は平均79.1%であった。このことから、農学部の多くの教員は、組織運営には活動の重点を置いてはいないが、与えられた仕事は確実にを行っている姿が浮かび上がる。

3) 組織運営の領域における自己点検評価

教授、助教授及び講師の多くが本領域に低い重み付けをしているが、全員が全学あるいは学部の委員を務めており、しかも、その多くが三つ以上の委員会を担っている。委員会で活躍することで組織運営に貢献をしている教員個人には高い評価を与えなければならないが、このような農学部の現状には、いかなる評価を与えたらよいか大いに苦しむところである。組織運営の高度化、効率化、集中化等を検討する必要があると考えられる。

3. 教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価

1) 総合評価の集計・分析と自己点検評価

<総合評価>

総合評価	総合評価点	実績評価点範囲	教員数
特に優れている	5	4.0～	22
優れている	4	3.5～3.9	20
おおむね良好	3	3.0～3.4	14
改善の余地がある	2	2.5～2.9	1
改善を要する	1	～2.4	0

<達成努力評価>

達成努力評価点範囲	教員数
90～	6
80～89	27
60～79	22
50～59	1
～49	0

①総合評価については、農学部の教員の73%以上が「特に優れている」または「優

れている」であり、これらに「おおむね良好」を加えると、98%にのぼる。したがって、平成17年度の農学部教員の総合的活動状況は高く評価できるものである。

②1人(2%)の教員が「改善の余地がある」となっているが、活動実績の内容については十分に高く評価できるものであり、本人の自己に厳しい姿勢が原因であった。したがって、農学部評価委員会はこれらの教員に対する改善のための指導等の必要性はないものと判断した。

③達成努力評価点について、17年度途中採用者1人は達成度が評価できないので56人分の集計となった。農学部の教員の59%が80点以上となっており、農学部教員の実績評価点は前年度よりかなり高くなっている。しかし、41%の農学部教員は79点以下と評価している。活動実績では優れているのに評価が低いのは、農学部教員が高い目標を掲げ、安易には満足をしなない厳しい姿勢を持っていることが分かる。